

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Das Menschheits Gesetz der Sprache <書評>
Author(s)	竹島, 俊之
Citation	広大言語 , 7 : 64 - 67
Issue Date	1967-12-18
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046277
Right	
Relation	



Das Menschheits Gesetz der Sprache (von Leo Weisgerber)

(1964. Quelle & Meyer Verlag Heidelberg)

竹 島 俊 之

この書は1949年～1950年のボン大学の冬期講義の概要を伝えるものであり、als Grundlage der Sprachwissenschaft と副題にもある如く言語の本質に就いて考察しようとしたものである。彼は例えばDie geschichtliche Kraft der deutschen Sprache (1950), Deutsches Volk und deutsche Sprache 1935 (1946), Der Sinn des Wortes Deutsch 1949, Die Sprache unter den Kräften des menschlichen Daseins 1949, 等々、数多くのすぐれた論文を書いているが、それらに述べられている彼の言語理論を理解するのに、この書は最適な入門書であるように思われる。

彼の研究分野は言語学全体に互るものであり、それは大きく分けてI Das Gesetz der Sprachgemeinschaft (Sprach-soziologie), II Das Gesetz der Mutter Sprache (Sprach-psychology), III Menschen-sein und Sprache (Sprach-philosophy) の三つに分けられる。

従来の言語研究の研究対象はギリシア語、ラテン語、近代語といった個々の言語の現象、形式を問題とし、その研究から得られたものはその特定の言語の理解であった。それ故に彼の言語学の重心もその上に置かれるわけであるが、さてそれでは従来の言語の研究方法によって真の理解が得られるだろうかと彼は反省する。即ち、従来の言語学では母国語 (Muttersprache) と言語共同体の全体性は余りにも無視されて来たのではないか「母国語はそれを荷っている言語共同体なしでは存在しないし、又母国語のない共同体も考えられない。この事から推論される事は母国語と言語共同体はその相互依存性に於いて一つの全体を形成する。そして学問的にもそれを全体として見なければ真の理解は得られないのである」(P. 30) そしてその全体を如何にしたら捉える事が出来るかを考えていくのである。彼はW.v.Humbolt の「言語はErgonではなくてEnergeiaである。即ちWerkではなくTätigkeitである」の有名な命題を理論展開の契機としている。即ち「Mutterspracheの存在形式はWirklichkeitであり、その本質はその現象ではなくてその行為である。その行為はその中に表明されている

Sprach kraftである。」(P. 31) EnergeiaとしてのMuttersprache は作用として次の三形式を含んでいる。イ. eine geistschaffende Kraft, ロ. eine kulturschaffende Kraft ハ. eine geschichtsmächtige Kraft そしてこれらを個々別に詳細に研究している。

彼のMutterspracheの研究がどのように設計されているか述べて見よう。

「我々は全ての言語には4つの面、即ちGestalt, Inhalt, Leistung, Wirkung があるという事から出発する。」それ故観察する場合にもgestalt-bezogene, inhalt-bezogene, leistung-bezogene, Wirkung-bezogene Betrachtung の4方向からなされる事になる。それらは全て同じ現象に向けられているのであるが, Ansatz, Methode という明瞭な差異を伴っている。(註:用語に関して言うと同じ事実を表わす場合でも用語上は異った表示がなされる。z. B. die gehaltbezogene Betrachtung に於てWortbedeutungとして近づき得るものはdie inhalt-bezogene B. にはWortinhaltとして現われ, die leistung-bezogene B. には Wortinhalt として現われる。) Methode に就ては文法, 言語学(静的と動的)という差異が重要である。文法に於てはある言語共同体の中に働いている母国語の意識化が重要である。sprachwissenschaftlich に於ては何をleisten し何をausrichten するかが問題である。die gestalt-bezogene, die inhaltbezogene Betrachtung は文法に属し, die leistungbezogene, die wirkungbezogene Betrachtung は 言語学に属する。しかしこれらの原理は互いに排他的なものではない。常に言語全体の観察が必要なのである。Sprachgestalt の研究に於ても可能な限り, Inhalt, Leistung, Wirkung に目が向けられていないといけない。唯独立した接近と間接的な接近とは明瞭に区別されねばならない。(上の例で言うときdie gestaltbezogene Betrachtung が直接的接近で, 後三者が間接的接近)。そして常に関係点を明らかにしておかないといけない。それ故にBezogenheit を指示する用語が用いられているのである。これがMuttersprach の研究に就ての大まかな設計図である。

次にこれらの個々のものは何を観察の対象とするかを述べてみよう。

(初めに) 語を考えて見ると音声形式と客観的なSeinの間には、ある精神的な内容物がある。即ちeine gedankliche Zwischenwelt=eine geistige Zwischenwelt が。我々が言語手段に出喰わすところではどこに於ても我々は精神によって構築された Wirklichkeit に関わり合わねばならない。そしてこの中に於てGestalt はこの Wirk-

lichkeitに気付き、或はそれを構築する際の発端、手掛りとなるものを形成し、die geistige Zwischenweltはその目的と成果を形成する。人間の「意識的なSein」と「客観的なSein」の間に於て動いているこの中間層は言語から分離され得ない関係にある。しかもその精神的な対象は母国語の構成要素であり、精神の所有物へ世界を作り変える道であり、成果である。ここにEnergeiaの本来の分野がありこの力がGestaltとWirksamkeitを獲得するのであり、その場が我々が母国語の世界像と呼ぶものである。

(1) die gestaltbezogene Betrachtung:さて文法とは潜在的な存在(この場合は母国語の世界像)を意識的な概観に持っていく事を言うのであるが、言語の意識化は先ず音声的に区別される言語形態の在庫品調べで始まる。(Z.B. 言語形式の目録、屈折表の査定等々)

さて音声的なものは手掛りであって目的ではない、それを抜け出して如何にして母国語の世界像に近づくかが問題となる。ここで言語の構成要素を考えて見ると、そこには音声形式の他にBedeutsamという要素があることがわかる。そして如何なる場合にBedeutsamであるかというそれが記号の役割を演じている限りに於てであると言われる。さてこの記号を設置する能力は象徴的機能といわれるものであり、我々がSprachliche Gestaltに於てぶつかる一切のものはこの象徴的機能に属しているのである。故に真のdie gestaltbezogene Grammatikはこの象徴的機能を解明しないといけない。

(2) die inhaltbezogene Grammatik:言語の精神面を規則的に捉えようとする新しい文法である。Pflanzeという語はドイツ語に於て価値を持っている。即ちPflanzeは形態と共にそれが通用するという価値を持っている。この価値を意識化する事がこの文法の使命である。言語内容とは言語の精神面なのであるがこの存在は作動的な価値として捉えられる。この価値を形式的に意識化する事が研究の最初の段階である。即ち内容の確認とは価値という概念を実体化する事である。それでは如何にしたら内容を確認し得るだろうか。ある語の価値を余りに単純に現物から解明しようとする人は言語内容を飛び越してしまう危険性がある。例えば青を「 $0.00014 \sim 0.00049\mu m$ の波長で普通の人の目に生ずる色彩感情」と定義する。しかし青は物理的定義のあらゆる可能性をもってしても汲み尽せず、そして言語共同体内部に於けるその価値と伝達にかかる学問的認識には全く依存していないのである。このような語の内容は先ず内部的言語明確さから探っていかなければならない。そして価値とはこの内部的言語明確さを土台としている。即ち母国語の内容は一種の明確さを持っており、あらゆる現実化はこの明確さを土台としている。この明確さの条件を探し出す事が言語共同体の中に生きている内容を意識化する作業より

も先決である。「正して」が言語明確さの特徴として意識化される。即ちこの「正しさ」という事が文法に於ては明確さの規準となる。それではこの「正しさ」は如何にしたら捉えられるであろうか。これを解くものはFeldという概念である。rot, grün といった母国語内容の形式は子供の意識の中に於て専ら個々の体験を集めるという方法で行なわれるのではない。子供は考えられ得る諸色調を実際に見ない前から正しい色彩を把握している。全色彩領域が数個の語の助けにより完全に分節され、個々の分節の価値が確立されると、子供はあらゆる個々の色彩語を正しく使用するようになる。「母国語」の把握に於てもこの事はそのまま当てはまる。即ち個々のものが一つ一つ付け加えられていくという事によってある言語的思考世界の構築がなされるのではなくて、全体、生活領域, Sinnbezirk が捉えられ、手が増えられ、言語的Feldの意味に於いて分節される事により構築がなされる。この言語的Feld は母国語の中間世界からの切片である。これは固定した形成物ではなくて、無限に働く言語力である。そしてその言語力は精神的な生活世界を人間精神の現実との対決に於いて形づくっていく。かくしてFeldという概念は言語内容研究の方法論 的に中心的な概念となる。そしてその研究は Wortfeld を出発点とし、Wortstände, die lebendigen Formen der Wortableitung のFeldbetrachtung を通過し文構造をも含む統語論的Feld の探究に迄至る。

ここ迄が静的な研究で(3)die leistung bezogene Betrachtung (4) die wirkung bezogene Betrachtung は 動的な研究になる。例えば(3)に於ては言語の経過を指示する用語Worten が最も重要な概念になっている事からわかる如く。

ではどのようにしたらそうした研究を具体的に進めたら良いかはこの書では述べられていないのでもの足りなさを感じるが、その点に関しては同じ著者のDie Vien Stufen in der Erforsdiuny der Sprachen 1963. Grundrüge der inhaltbezogenen Grammatik 1962 などが参考になると思う。